

無量寿経の成立と展開について レジюме

日本佛教学会第81回学術大会

2011年8月30日於北海道大学

発表者 高橋審也 (武蔵野大学)

ここでいう無量寿経とはいわゆる魏訳と称され、浄土教各派によって正依とされている『無量寿経』のみならず、『大阿弥陀経』『平等覚経』等の初期の二十四願経、魏訳以降の諸訳、さらにはサンスクリット語原典、チベット語訳を含めて意味する。

但し、今回の発表は原始大乘とも称される『大阿弥陀経』を中心に魏訳、梵語訳等を参照しながら、無量寿経に見られる浄土思想の成立の基盤と背景について考えて見たい。

発表者は日本佛教学会年報第74号において「初期大乘仏教教団と戒律」という題で発表した。その中で次のように考察した。

初期の大乘仏教は自らを bodhisattva (菩薩) であると自覚した人々によって起こされた。元来菩薩とは原始・部派仏教においては基本的にブッダ・釈尊の前身・前生をいうものであった。釈尊の前身・前生とは摩耶夫人の体内に受胎し誕生し、王子として成長し妻子を設けながら、王宮の生活を放棄し、六年間の苦行を経て、ガヤーの菩提樹の下で覚りを得て、ブッダとなるまでのゴータマである。さらには前生において無限の時間を経ながら生死を重ねつつ、その間に多くの利他行・慈悲行を実践した結果、覚りを得べき身として、カピラヴァストゥに出生した。前生においてゴータマは出家者、バラモン、神々などとして、あるいはサルや鹿やウサギなどの動物として善行功徳を積み重ねた。その結果として、覚者ブッダとなったのである。

大乘仏教者は自らもゴータマのように未来において仏果を得るべく邁進努力すべきものとして自覚し、菩薩と自称したのであると思われる。菩薩としてのゴータマには出家者としての時代も在家者としての時代もともに含まれる。それをモデルとする菩薩の概念には当然出家者、在家者両者ともに包括するということになる。

初期の大乘仏教の教団は当然、出家・在家より成り立っていたが、その主導権を握っていたのは出家者であったと思われる。しかし、大乘の教団は教団といっても生活共同体である僧伽(サンガ)としての教団とは異なった有り方であったので大乘教団独自の戒律が存在することもなかった。

大乘経典は恐らく仏塔において、菩薩が何らかの三昧に入って、ブッダの説法を聴聞したという体験において成立した可能性が高い。大乘教徒達は仏塔や特定の地域に随時集合し、大乘経典の読誦や書写、経典供養などによって勢力を拡大して行ったものと思われる。大乘仏教徒はその奉ずる諸仏や諸経典によってそれぞれのグループを形成していたと思われる。

本発表では、無量寿経の内容を検討しつつ、以上のような考察が妥当性を有するかどうかについて確認したいと思う。

キーワード 無量寿経・大乘仏教・菩薩